

採卵当日にセルフコントロールができない患者への関わり～事例を通しての学び～

関藤由佳里 佐野郁美 金田真紀 杉本朱実 西原卓志 森本義晴  
医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

### 【はじめに】

前医で採卵時パニック症状を経験した患者に対し、看護師と心理士の介入により、採卵当日パニック症状を起こすことなく、採卵を実施することができた事例を報告する。

### 【症例】

31 歳女性。不妊治療歴 3 年。初診時、前医で採卵当日パニックになり、暴言暴力を振るったり泣き喚いたり、セルフコントロールができなかったと本人より情報提供があった。診察後は毎回看護師と面談し、患者の想いを聴く場を設け、採卵に対する不安や恐怖心を傾聴・共感した。また、事前に採卵室の見学を提案し実施した。採卵決定日の説明看護師は採卵当日も担当した。採卵当日にも心理士の介入が必要と考え、事前に心理カウンセリングを行った。患者のペースで採卵ができるよう採卵の順番を調整した。採卵当日、不安と緊張にてロビーで動けなくなり、採卵まで担当看護師は付き添い、タッチングを行った。また、心理士も立会い、麻酔導入まで EMDR（眼球運動による脱感作と再処理法）を実施した。採卵当日パニック症状は出現しなかった。

### 【考察】

面談を行った結果、採卵に対する不安や恐怖の要因は複合的であり、感情のセルフコントロールができない状態であったと考える。看護師は常に傾聴し共感的に関わることで、信頼関係を構築できた。不安の要因の一つとして、初めての場所は緊張や不安を伴いやすいため、メンタルリハーサルを目的として採卵室を見学したことも、不安の軽減に繋がったと考える。また、採卵決定日の説明をした看護師は採卵当日にも立会い、サポートした事で精神的な安定に繋がり、さらに、心理士による専門的アプローチによりセルフコントロールができたことで、採卵当日に暴言暴力やパニック症状を起こさなかったと考える。今後もこのような事例に対しては、患者がもつ様々な想いを理解した上で、対象者に合わせた看護ケアと心理士を含めた支援体制を強化していきたい。